

浄御原宮推定地周辺の調査

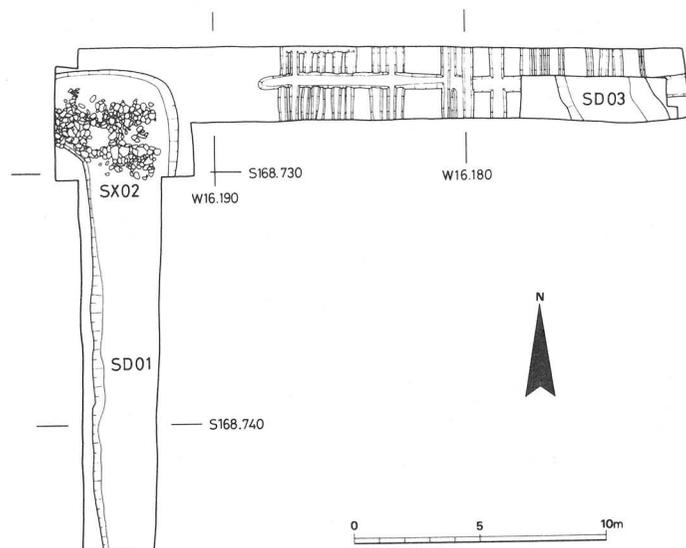
(C調査地 昭和55年8月)

(D調査地 昭和55年12月)

浄御原宮推定地では、東辺の2カ所で調査を実施した(64頁位置図参照)。このうち、C調査地では、西方を流れる通称「木部川」の氾濫による砂層を確認したにとどまり、ここではD調査地の調査について述べる。

D調査地 この調査は水田畦畔の崩壊防止工事に先立って行ったもので、調査地は飛鳥寺の北方350mにある。調査地の東100mには、多武峯山塊からのびた丘陵がせまり、その先端は「飛鳥壘」と呼ばれ、戦国時代の土豪飛鳥氏の山城跡と推定されている。調査は水田の西・北辺にそって、幅3mの調査区を東西24m、南北20mのL字形に設定して実施し、飛鳥時代や「飛鳥壘」に関わる遺構の確認を目的とした。

調査地の主な層序は、耕土(20cm)、床土(40cm)、灰褐色粘土(20cm)、暗灰褐色粘土(30cm)、暗茶褐色粘土(20cm)、茶褐色粘土(20cm)及び茶褐色砂礫となり、暗灰褐色粘土上面でL字形に曲がる中世の大溝SD01を、地山である茶褐色砂礫上面で7世紀初頭の斜行大溝SD03を検出した。



D調査地遺構配置図(1:300)

SD01は幅3.6m、深さ1.4mの素掘りの溝で、南北トレンチ北端で直角に西方へ曲がる。溝の堆積土は4層に大別され、底から青灰色砂(10cm)、青灰色粘土(70cm)、細砂と粘土の互層からなる灰褐色砂(40cm)、炭化物を含む暗灰色砂質

土（20 cm）である。大溝隅にある集石遺構 SX 02 は、灰褐色砂の堆積後に構築されており、約40 cm 大の花崗岩の北面をそろえて2段に積んだ石列と、石列の北西を中心に広がる玉石群とからなる。玉石群は石列構築後なお数層の堆積を経たのちに形

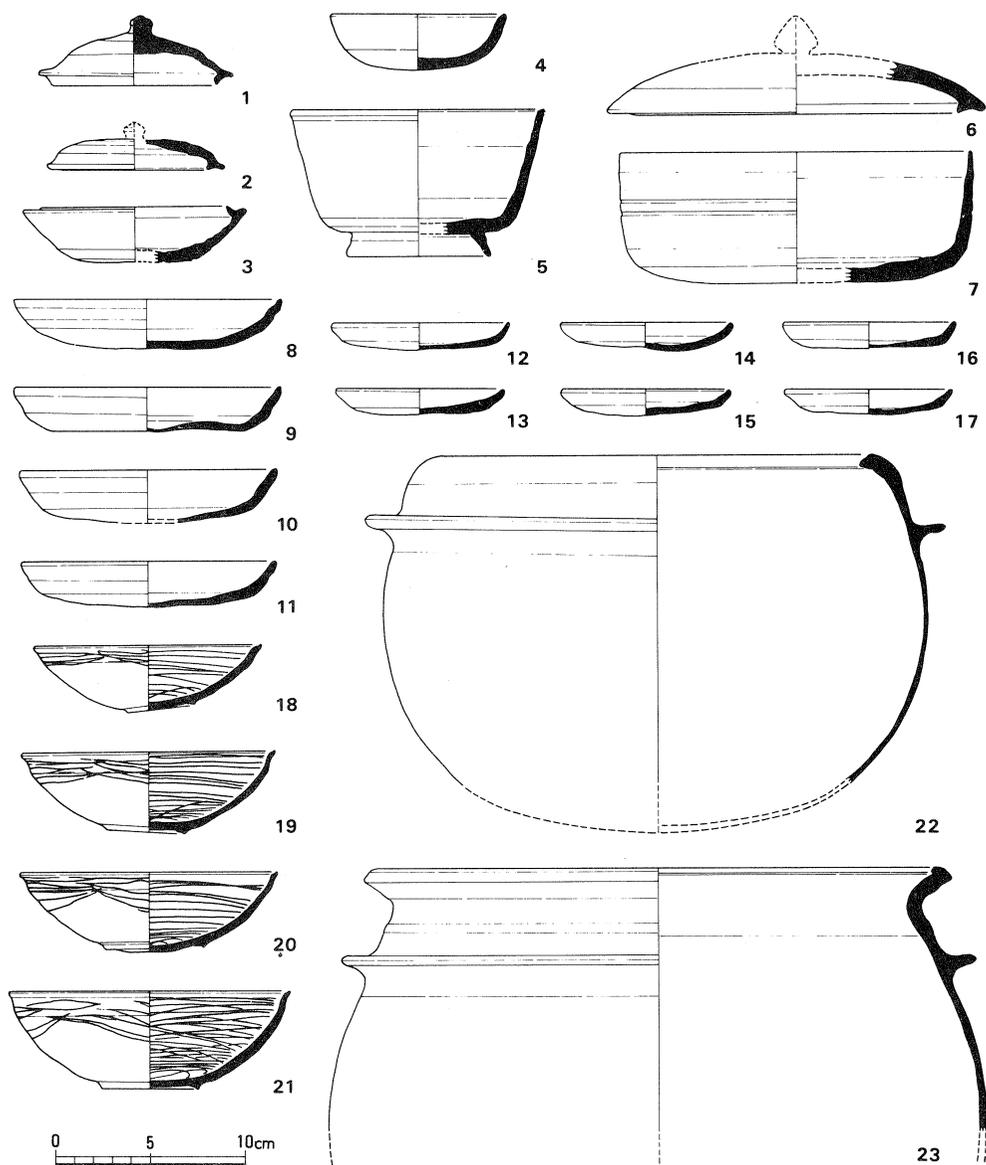


D調査地 SX 02（南から）

成されており、集石遺構の性格・機能については不明な点が多い。遺物は主に上層2層から出土し、瓦器碗18～21，土師器皿8～17，羽釜22・23がある。瓦器碗では、口径13 cm強の19・20が大半を占め、わずかに口径14.7 cmの21や12 cmと小さい18が含まれている。従って、出土土器の年代観によると、この溝は、12世紀中頃に始まり13世紀中頃に埋没したものとみられる。

斜行大溝 SD 03は、SD 01 検出面の下約70 cmの地山面で検出した。幅3.5 m、深さ1.1 mの素掘りの溝で、堆積土は底から青灰色砂、青灰色粘土、暗茶褐色粘土の3層に大別される。このうち、溝の最上層にある暗茶褐色粘土は溝を埋めた層であり、この層からは土師器4，須恵器1～3，5～7が出土した。これらは、飛鳥地域土器編年では7世紀第I四半期に比定される。

上述のように、本調査では、中世の大溝と7世紀初めの斜行大溝を検出した。今回検出したSD 01は、12世紀中頃～13世紀中頃に営まれた直角に折れ曲る溝である。これは、先年第27—6次調査（概報10）で検出したSD 2666・2665などと類似している。SD 01には、その北西隅に一時溝をせきとめる機能を果たしたとみられる集石遺構SX 02が築かれている点で、先の類例とは異なっているものの、中世集落を区画する溝の一部と考えられる。その場合、調査地は路東4里29条14坪にあり、その南西の坪界にそってL字形に流れる木部川との間の約¼坪を集落とみることができよう。なお、「飛鳥壘」は同23坪全域を占めて



出土土器実測図 (SD03: 1~7, SD01: 8~23)

いるが、通説とこの溝とは一世紀以上の年代差があり、土豪飛鳥氏との関わりをにわかに論ずることはできない。

斜行大溝SD03は、長さ2mを検出ただけであり、周辺の遺構やその性格等について不明な点が多い。ただ飛鳥寺北限の北1町余にあり、その創建とはほぼ同時期の溝として注目すべき遺構である。いずれにせよ、この地域は今後、広範囲な調査を要する地域である。